

TOPICS

全国ハトムギ生産技術協議会現地セミナー 平成22年度第1回東北農業研究センター 産学官連携交流セミナー 「ハトムギの生産・加工と機能性研究の今」

平成22年7月29～30日の2日間、岩手県奥州市、花巻市、盛岡市において、全国ハトムギ生産技術協議会と平成22年度第1回東北農業研究センター産学官連携の合同セミナー「ハトムギの生産・加工と機能性研究の今」が開催されました。ハトムギは機能性や美容効果などから近年注目を集めていることを反映して、岩手県のほか北海道から九州まで広範囲の生産者、農協、行政、研究機関などから約140名が参加しました。

初日は、奥州市衣川区押切の圃場と花巻市鍋倉字幸神の圃場の2カ所の現地圃場を見学しました。衣川の圃場では地力が高く、施肥や防除が行き届き、ハトムギの生育は旺盛でした。花巻の機械移植圃場は、植え傷みや欠株が少なく、連作圃場にもかかわらず生育は良好でした（写真1）。その後、花巻の渡り温泉において講演会が開催されました（写真2）。講演会では、JA岩手ふるさとの小野寺氏より奥州市衣川区におけるハトムギ栽培の状況、JAいわて花巻の阿部氏より花巻市

におけるハトムギ栽培の状況について報告がありました。また、東北農業研究センターの渡辺上席研究員より、東北農研における雑穀の機能性研究、とくにハトムギの脂質代謝改善作用について報告がありました。さらに、千葉製粉の宮越氏より、千葉製粉におけるハトムギ商品開発の歴史やハトムギ原料へのこだわり、製品開発、基礎研究など、とくにハトムギの機能性として美白効果について説明がありました。2日目はプロ農夢花巻の雑穀加工施設を見学し、高橋氏より雑穀加工施設と商品開発について説明を受けました。その後、東北農業研究センターの品種・系統比較試験圃場で、既存品種と今年度品種登録申請予定の「東北4号」と「九州3号」を視察し、当センターの品種開発の状況を紹介しました。

現地圃場や試験圃場、加工施設の見学の他、講演会では栽培から加工・商品開発、機能性研究まで幅広い内容の報告があり、参加者間の交流にも充実したセミナーとなりました。（寒冷地特産作物研究チーム 加藤晶子）



写真1



写真2

TOPICS

シンポジウム 「耕地生態系における生物間相互作用を作物栽培技術に活かす」を開催

2010年8月20日に東北農業研究センターと日本雑草学会の主催、日本応用動物昆虫学会と日本土壌動物学会の共催で、標記シンポジウムを福島市のコラッセふくしまで開催しました。

持続的で生産性の高い農業技術が国民的課題とされている今、農地における生物間相互作用をいかに活用するかが課題解決の重要なポイントであるといえます。そこで、関係諸学会の参画を得て、生物間相互作用に関連する最新の研究成果の講演をいただくとともに、それらを栽培に活用するための問題点と解決法について論議しました。シンポジウムでは、技術開発の基礎研究として、1) 耕地の生物間相互作用を組み込んだ雑草動態モデル2) 窒素栄養に対する菌根共生系の関与3) 土壌動物と植生や栽培管理との関係、応用的研究では、1) 間・混作における、拮抗微生物を利用した病虫害抑制効果、2) カバークロップのキャベツ害

虫密度抑制効果、3) くず麦利用カバークロップダイズ栽培、について話題提供がありました。総合討論では、生物間相互作用の活用が、今後の環境保全型農業技術の開発に有効な手段となることを確認したあと、時間的、空間的に要因が複雑に絡み合う生物間相互作用を解析する困難性と解決手法の必要性、研究における専門性の壁を克服するための研究連携しやすい体制作り、病虫害管理では圃場だけではなく天敵相の増強等につながる圃場周辺の植生管理、景観の活用が必要であるなど、多くの意見が出されました。

また、当日は会場にカバークロップ研究チーム員の成果をポスターで発表したコーナーも設け、そこでも研究成果に対する活発な意見交換が行われました。

今回、全国から、大学、民間、行政および試験研究機関をはじめ生産現場の方々を含め105名の方々に参加していただきました。とくに、雑草学会、応用動物昆虫学会、土壌動物学会という異なる学会が一堂に会し、学際的な研究成果を発表することにより、新たな生物間相互作用の認識と研究連携の必要性を再確認するなど、今後の環境保全的農業技術の研究の展開に有意義なシンポジウムとなりました。

（カバークロップ研究チーム 山下伸夫）

